

## 「自分の考えを自分の言葉で伝えることのできる児童の育成」 ～算数科において「書く活動」と「学びの場」の活用を通して～

### I 研究の内容

#### 1 研究の具体的内容

- (1) 児童の実態の把握
- (2) 「自分の考えを自分の言葉で伝えることのできる児童の育成」の理論研究と「書く活動」と「学びの場」の効果的活用法の研究と実践。
- (3) Q-Uの実施（5月、11月）後の分析と活用。
- (4) 山梨県学力把握調査（3、5年）、全国学力学習状況調査（6年）の結果分析

#### 2 研究の具体的方法

- (1) 年度初めに、研究部で提案し全体で検討した「算数学習アンケート」を作成し、児童対象に行う。その結果に基づき、算数科における「自分の考えを伝える力」の向上のために取り組むべきことを全校体制で確認し、年間を通して実施していく。年度末に同じアンケートを実施し、児童の変容を見取り実践を振り返る。
- (2) 算数科の授業において、「書く活動」「学びの場」を活用し、学習過程を工夫した授業実践を日常的に行う。（図・式・言葉などで表す。ペアやグループで発表等）
  - ・低・高1本ずつ共同研究とし、ブロックにおいて事前に検討会をもち、その後全体会で検討する。
  - ・授業には、NRT や各種諸調査の結果を受けての改善点を取り入れる。
  - ・「書くこと」の上達のために、日頃から、日記や行事後の作文、学習感想などを書かせ、書くことに慣れさせる。児童のノートを紹介し合うなどして、ノートの取り方の工夫を学び合わせる。
  - ・様々な場面における「学びの場」のあり方を検討し、実践する。
  - ・言語環境をととのえるための日常的取り組みを行う。  
（あいさつ・おすすめの本・朝の会や帰りの会のスピーチ等）
- (3) Q-Uの実施後、全体会で結果を発表し、その後ブロックでK13法で細かく分析し、今後の指導法や留意点について話し合う。
- (4) 山梨県学力把握調査（3、5年）、全国学力学習状況調査（6年）の結果を担任から発表してもらい、全職員で今後の指導における留意点を確認し合う。
- (5) 「書く活動」と学びの場を取り入れた算数科の授業・指導案について」学習会

峡東教育事務所指導主事 柴田 幸也先生  
甲州市教育委員会指導主事 久保田英樹先生

(6) タブレットを使った「教育機器活用」の学習会

総合教育センター主幹研修主事 油井 壮介先生

総合教育センター副主幹研修主事 中村 英彦先生

(7) 保護者・地域住民との連携。「家庭学習の手引き（祝小版）」検討・作成

## II 成果と課題

### 1 成果

- ・教科を算数科にしぼったことで、自分の考えを図・式・操作・言葉などで表すことやペアやグループを使って発表することなどの活動を、発達段階に応じて、全校で研究実践することができた。
- ・本校の児童の実態や課題に合った研究主題であり、今までの6年間国語科において研究してきた、「書く活動」や「学びの場」を、新たに算数科にしぼって研究し、深めていくことができてよかった。
- ・「書く活動」を効果的に取り入れ「学びの場」を活かすことで、児童が自信を持って自分の考えを伝えることができる姿を見ることができた。
- ・「算数学習アンケート」をすることにより、児童の指導に必要なことは何なのかを把握することができた。二回のアンケート結果から、児童の変容に気づき、その後の実践にいかすことができた。
- ・授業案をブロックで検討することにより、研究が深まり良かった。
- ・年間を通し、「自分の考えを図や式などに表す活動」を取り入れたことにより、算数科における「書く活動」が以前より向上してきている。
- ・アンケートにおいても「自分の考えをみんなの前で発表することが好き」な子どもが増えており、力を伸ばすことができた。
- ・NRTなどの学力調査の結果も考慮に入れながら課題分析をしていったので、深まりのある研究になった。また、Q-Uや学力調査の分析をすることで、それを学級経営や授業に活かすことができてよかった。

### 2 課題

- ・算数科にしぼって研究を進めた初年度であり、実態把握のための「算数学習アンケート」の検討からのスタートであったため、研究の焦点がやや曖昧な点もあった。
- ・「書く力」も「自分の考えを伝える力」も向上してきているが、児童の実態を見るとまだ十分に満足できない部分もある。今年度の反省をいかし研究を進めたい。

## III 成果物 【低学年・高学年ブロック共同研究】

第3学年 算数科授業案 「分けた大きさの表し方を考えよう」

志村 克人 教諭

第5学年 算数科授業案 「比べ方を考えよう」

新藤 徹 教諭

(研究主任 柏原 真澄)